

高次脳機能障害者の職場の上司や同僚等を対象とする コミュニケーションパートナートレーニング

○土屋 知子 (障害者職業総合センター 研究員)
松尾 加代 (大阪河崎リハビリテーション大学)
春名 由一郎 (障害者職業総合センター)

1 背景と目的

高次脳機能障害者の社会参加において、コミュニケーションの困難が障壁となる場合がある。コミュニケーションの問題は周囲との相互関係の中で生じるものであるため、問題解決のためには、障害のある当事者への支援だけでなく、環境への働きかけを含めて考えることが重要である。

コミュニケーションパートナートレーニング (以下「CPT」という。) は、コミュニケーションに障害のある高次脳機能障害者の周囲の人に対して、障害特性に応じた適切なコミュニケーションについて情報提供や助言を行い、練習の機会を提供する支援方法である。CPTは国内外において、高次脳機能障害者の地域社会への統合促進に関わる成果を上げているが、職場適応促進に焦点をあてた取組は見当たらない。

本研究は、高次脳機能障害者の職場適応促進を目的とするCPTプログラムを開発し、その効果を検討することを目的とした。

2 方法

(1) 研究参加者

企業等において高次脳機能障害者の上司や同僚、部下、企業在籍型ジョブコーチや障害者職業生活相談員として勤務していることを条件に募集した。

(2) 研究デザイン

待機リストを用いた非ランダム化比較試験とした。具体的には、参加者を2群に割り付け、時期をずらして各群にプログラムを実施した (以下、先にプログラムを実施した群を「介入群」、後でプログラムを実施した群を「待機群」という。)。両群へのプログラム実施前時点 (測定1) と介入群へのプログラム実施後時点 (測定2) において、以下に述べる指標について測定し、両群の得点の変化を比較した。また、各群へのプログラムの約1か月後に参加者に対してフォローアップ調査を行った。

(3) プログラムの内容

先行研究を参考に、講義と演習からなるプログラムとした。高次脳機能障害者の障害特性としては、失語症と認知コミュニケーション障害の両方を想定し、職場での作業指示や職務に関わる相談場面を設定した演習を含めた。プログラム内容を表に示す (詳細は参考文献に記載)。

表 プログラムの内容及び時間配分

概要	形式	時間
オリエンテーション	—	5分
高次脳機能障害とは	講義	10分
コミュニケーションを支える認知機能	講義	15分
参加者の自己紹介	—	15分
会話場面の録画① (希望者2名のロールプレイを録画する)	演習	10分
観察演習1 (シナリオに基づく架空場面の動画の登場人物のコミュニケーションについて話し合う)	演習	15分
よいコミュニケーションのための15のスキル	講義	70分
観察演習1の解説	講義	20分
観察演習2 (シナリオに基づく架空場面の動画の登場人物のコミュニケーションについて話し合う)	演習	10分
観察演習2の解説	講義	15分
スキル演習1 (わかりやすい言葉を選ぶ)	演習	15分
スキル演習2 (簡潔な文で話す)	演習	15分
スキル演習3 (話す内容を整理する・視覚情報を活用する)	演習	20分
スキル演習4 (伝えるスキル総合)	演習	30分
スキル演習5 (相手の様子をよく見る・ゆっくり待つ)	演習	30分
スキル演習6 (推測して確認する・聴き取るスキル総合)	演習	30分
会話場面の録画②と振り返り (会話場面の録画①と同じ参加者が同じテーマでロールプレイを再度行い、その場면을録画する。参加者全員で録画を視聴し、コミュニケーションが変化した点を振り返る)	演習	15分
まとめ・質疑応答	—	30分

(4) 効果測定 of 指標

高次脳機能障害者とのコミュニケーションに関する知識、興味、自信及び意欲を効果測定 of 指標とした。知識 of 測定 of 素材として、高次脳機能障害者とその上司 of 会話場面の動画 (シナリオに基づく架空場面) 2場面を用いた¹。動画を参加者に提示し、上司役 of 人物 of コミュニケーション of 改善すべき点を列挙するよう求めた。各参加者が挙げることができた適切な改善点 of 個数を得点とした。なお、2

¹ 効果測定に用いた動画は、プログラムの観察演習1, 2 of 教材として用いた動画とは異なる動画である。

場面のうち、一方は高次脳機能障害者の人物の主症状が認知コミュニケーション障害である設定（課題①）、他方は失語症である設定（課題②）とした。興味、自信及び意欲については、11段階のリッカート尺度を用いて参加者の自己評定を求めた。フォローアップ調査においては、プログラムで取り扱ったスキルの職場での活用状況と、高次脳機能障害のある同僚や部下等とのコミュニケーションの変化などについて尋ねた。

3 結果

参加者31名のうち、プログラム当日及び前後の測定のすべてに参加した28名（介入群16名、待機群12名）のデータを分析対象とした。分散分析を行った結果、興味を除くすべてについて、群と測定時点の交互作用が認められ、介入群において有意な得点向上が認められた（知識の課題①、②及び自信は1%水準で有意、意欲は5%水準で有意）

（図）。興味は交互作用が有意傾向であり、介入群で得点が向上していた。

フォローアップ調査においては、参加者の多くが、プログラムで取り扱ったスキルの多くを職場でも活用していると回答した。自由記述欄では、高次脳機能障害のある同僚や部下等との意思疎通が前よりも正確になった、会話が增えた、信頼関係が強まった、といった内容の記述が多く見られた一方で、多忙な職場において時間をかけて丁寧にコミュニケーションを行うことの負担感についての記述もあった。

4 考察

今回開発した CPT プログラムは、高次脳機能障害者の上司や同僚等の、高次脳機能障害者とのコミュニケーションに関する知識、自信及び意欲の向上に対して有効であり、興味の上昇に関しても有効な可能性があると考えられる。

本研究の限界の一つとして、CPT の効果について参加者側の変化のみを検討した点がある。高次脳機能障害者の職場適応促進に対する CPT の効果についてより明確な結論を出すためには、参加者の同僚等である高次脳機能障害者の職場適応に関する指標（例えば、職業満足度や職場ストレスなど）について、CPT 実施前後での変化を検討することが必要であると考えられ、今後の課題である。

【参考文献】

障害者職業総合センター『高次脳機能障害者の職場適応を目的とした職場のコミュニケーションへの介入—コミュニケーションパートナートレーニング—』, 「調査研究報告書No.151」, (2020)

【連絡先】

土屋 知子 障害者職業総合センター研究部門
e-mail : Tsuchiya.Tomoko@jeed.or.jp

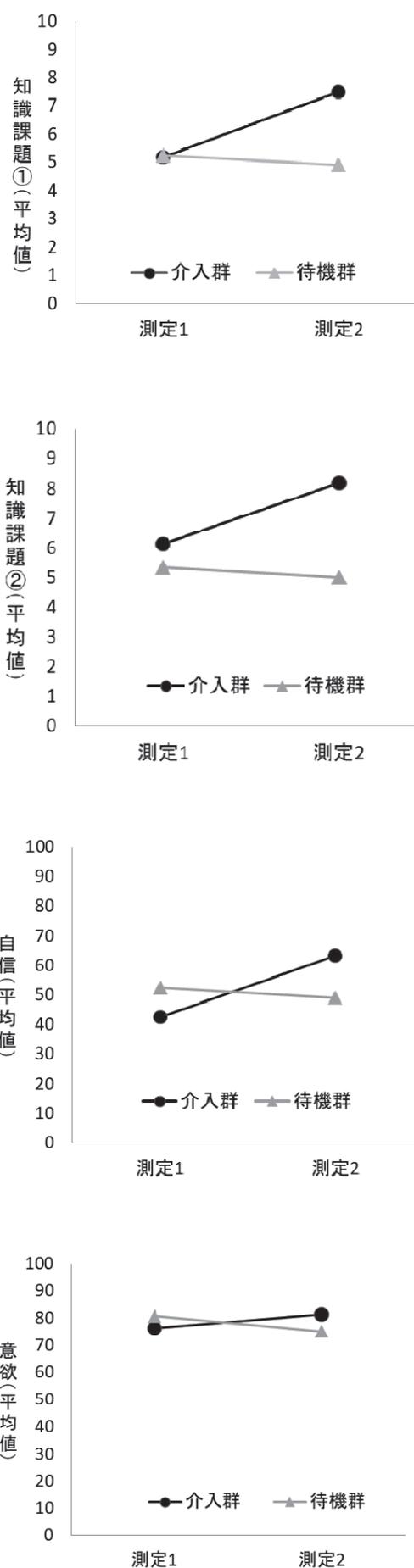


図 各測定項目について両群の得点の変化